



写真① 大阪住の江競輪場

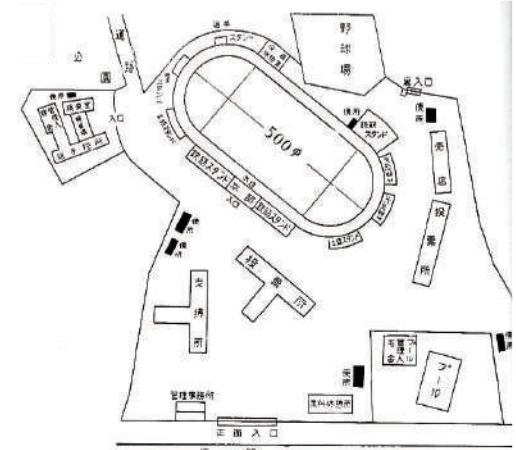


図1 大阪住の江競輪場略図

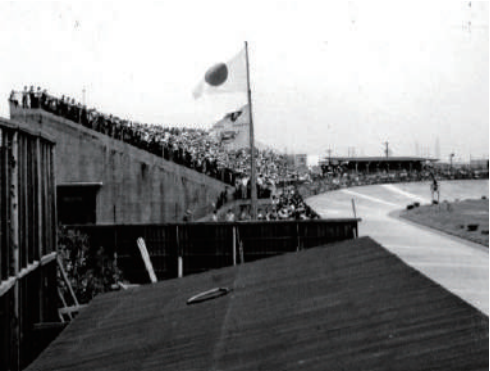
初期のころの競輪場、昭和37年頃にはプールは撤去され苗圃になった。大阪競輪史より

二番手となった大阪では、昭和二十三年（一九四八）九月二十一日に大阪自転車振興会を創設、年内開催に向けて約二カ月の期間で組織の立ち上げ、職員の訓練、資金調達、競輪場の確保など準備が進められます。

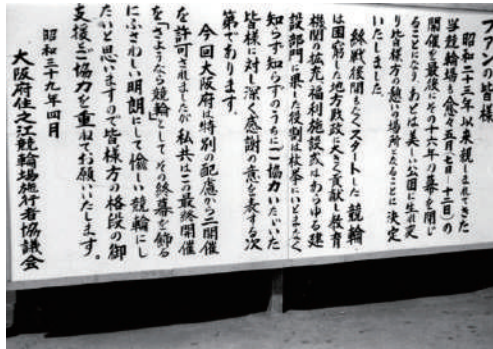
振興会は直ちに大阪府に対し競技場の建設を働きかけますが、当時の大阪府では府の財政のみでは困難なため振興会及南海鉄道に寄附を求めています。競技場の候補地は最初は住吉公園としましたが、狭小なため住之江公園の陸上競技場を利用することになり、一部大阪護國神社の敷地を編入した建設案を立て、九月府議会において建設案を可決し、直ちに建設に着手。十一月下旬に竣工しました。

そして、年内の十二月十一日に第一回大阪住の江競輪を開催、競技に先立ち開場式が行われ、その後十一日、十二日、十八日、十九日、二十五日、二十六日の六日間開催され、六日の総入場者数二三、九三一名、入場料収入三一四、九五円、車券売り上げ三六、八二三、三五〇円と驚異的成功を収めました。（注2）

発足以後、順調に進んできた住の江競輪場でしたが昭和二十四年（一九四九）四月十六日に騒擾事件（注3）が起き、その後各地の競輪場で事件が多発し、そのたびにマスコミが事件を取り上げ、競輪存続の是非が論じられました。その原因として考えられるのは、特に昭和二十四年（一九四九）から二十五年にかけての競輪場建設ラッシュによるもので、昭和二十三年（一九四八）の二カ所に対し、二十四年には十九カ所、二十五年には三十五カ所が新たにオープンしています。（注4）このように、運営側も観客も未成熟だった中で瞬く間に競輪場が増え、それぞれに新しい主催者、自転車振興協会が発足したため、その都度体制の立ち上げに対応せざるを得なかったことがあります。



写真② 最終日のスタンドの観客



写真③ 入口に設置された看板



写真④ 最終レースの状況とお礼の看板

住之江公園と競輪場

終戦後の大阪府営公園

本誌第18号では昭和十七年（一九四二）に住之江公園に大阪護國神社が創建され、その影響による公園改修までを見てきました。戦時中は府営公園の管理は十分ではなく、また食糧増産に利用されるなど荒廃した状態でした。

戦後の府営公園を見ると服部緑地を除く久宝寺緑地と大泉緑地は、自作農創設特別措置法により公園として買収し計画されていた用地はなくなり、再度用地買収から始めることになりました。その他の府営公園でも人も物資も金もない時で十分な維持管理が行われていませんでした。昭和二十三年（一九四八）になるとようやく日本経済も動き出し、失業対策事業による公園施設の改修が行われるようになります。

日本で2番目、住の江競輪場出来る

このような中、住之江公園では競輪場が設



写真③ 国宝住吉造本殿（住吉大社第二本宮）

古代建築の様式美のなかにハス型の装飾金具が散りばめられている。



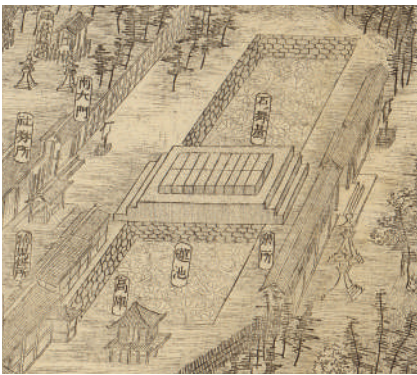
写真④ 鬼板



写真⑤ 懸魚



写真⑥ 明治時代の反橋と神池（着色写真）
反橋の俗称を太鼓橋というが、池の水面に映ったアーチ形を合わせて太鼓のような形状に見えることに由来する。しかし、明治時代の池は一面にハスが繁茂していたことがわかる。



絵図② 住吉の蓮池
『摂津国坐官幣大社住吉神社之図』明治13年(1880)
明治初期の境内図には、石舞台のある池の呼称を「蓮池」と明記し、池面には大きなハスが所狭しと描かれている。

住吉大社とハスのこと

前面のとおり、かつて住吉ではハスが身近な存在であったようです。

住吉大社の本殿は朱塗りと胡粉塗りのコントラストが美しく、直線的な檜皮葺の屋根、ギザギザの玉垣とともに住吉造を構成しています。よく注目してみると銅板の一部に、金色のハス型の装飾金具が計八ヶ所も付いています（写真③）。

一つは屋根の上で、箱棟の両端を装飾する鬼板おにいたの中央の一つあります。さらに、屋根から下方へ三ヶ所ぶら下がった、破風板の妻飾りである懸魚けぎょの中央にも同じハス型の飾金具が見られます。（写真④⑤）

古代神殿の形式をよく伝える住吉造本殿ですが、蓮花の飾りは神仏習合の名残り

であると説明されています。

住吉の象徴である反橋の架かる神池はかつてハスが繁茂していました（写真⑥）。また、石舞台のある池もハスが名物で、特に「蓮池」と呼称されました（絵図②）。

ところで、明治三十三年（一九〇〇）八月九日、与謝野鉄幹は山川登美子と鳳晶子（後の与謝野晶子）をともなつて住吉大社を訪れ、それぞれ歌を詠んでいます。

・神もなほ知らじとぞ思ふなさけをば蓮の
うぎ葉のうらに書くかな 鉄幹
・歌かくと蓮の葉をればいの中に小さき
こゑす何のささやき 登美子
・松かげにまたも相見る君とわれ多にしの
神を憎しとおぼすなき 晶子

そのエピソードを基に、田辺聖子は小説『千すじの黒髪わが愛の與謝野晶子』に、住吉大社へ詣でた鉄幹ら三人を生き生きと描き、鉄幹に恋心を抱く登美子と晶子が住吉のハスの葉に歌を書くときのやりとりを脚色して紹介しています。

これら境内の池に繁茂していたハスは、昭和三十年頃の没落しえつろなどで数を減らし、やがて枯死し現在では見られませんが、神社であるため仏教色の強いハスを再生することは試みられなかったようです。

ちなみに、住吉公園のハス（写真②）は、明治十八年（一八八五）小山卯之助（後の住吉村助役、小山楼主人）が私財を投じハス六〇〇本を植えたことに由来するそうです（明治三十五年『日本の勝景』）。

（小出英詞）